

# フランスところどころ

酒 井 寿 紀



# 目 次

1 . はじめに.....	4
2 . パリ(マレ地区) .....	4
3 . ニース.....	10
4 . アルル.....	14
5 . エクサン・プロヴァンス.....	18
6 . アヴィニオン.....	22
7 . リヨン.....	24

## 1 . はじめに

女房も私も旅行が好きなので、二人とも50歳を過ぎた93年から、2年に1回海外旅行をすることにした。まだ体力のあるうちに遠くの方から手を着けようと、93年にはイギリス、フランス、スイスを周り、95年には南フランスへ出かけた。

本編はそのうちフランスでの見聞を記したものである。合計して10日余りの滞在にすぎないため、独断と偏見に満ちたものになるだろうが、無知な者のたわごととご容赦頂きたい。

## 2 . パリ（マレ地区）

「あったもの」、「なかったもの」、「なくなったもの」

93年の5月に女房と二人でヨーロッパに行った。仕事以外でヨーロッパに行くのは始めてだった。パリではマレ地区（Le Marais）を一日歩き回った。ここには古い建物が残っていると聞いていた為である。

途中の博物館の売店で、パリの昔の地図のコピーを買った。1675年に作られたものということなので、ルイ14世の時代のものである。約1メートル四方もある大きいもので、スーツケースにも入らないので、丸めて手で持って日本に帰ってきた。

これを見ているとなかなか面白い。先ず当時から「あったもの」を捜してみる。ノートルダム寺院、ルーヴル、パレ・ロワイヤル、テュ

イルリの公園、サンジェルマンの教会、等が見える。

当時は「なかったもの」には、凱旋門、コンコルド広場、オペラ座、マドレーヌ寺院、そしてもちろん、エッフェル塔、等がある。凱旋門、エッフェル塔、モンマルトル等はだいたい当時のパリの地図の範囲外である。当時のパリの西端は今のコンコルド広場の辺で、その西の現在のシャンゼリゼの繁華街はすべて市外である。

逆に当時はあったが、その後「なくなったもの」には、バステューの城塞、テンプルの修道院、テュイルリの宮殿等がある。

バステューの城塞は現在の地下鉄のバステュー駅の辺で、現在も地下鉄の駅で城塞の基礎を見ることができる。ここが当時のパリの東端だったようだ。

テンプルの修道院は現在の地下鉄のレピュブリク駅付近にあったらしい。ここが当時のパリの北端だ。

テュイルリの宮殿はルーヴルとテュイルリ公園の間にあったが、パリ・コンミューンの時火事で焼けてしまったという。

このように、今から約300年前のパリは現在とかなり違う。しかしマレ地区の辺をよく見てみると、「ヴォージュ広場」も「オテル・カルナヴァレ」という当時の貴族の館も見つけることができる。われわれが歩いた「Rue St. Antoine」、「Rue Des Francs Bourgeois」、「Rue des Quatre Fils」等の道の名前もそのままだ。この辺がいかに変わっていないかが分かる。

セーヌ河にかかっている「Pont Notre Dame」、「Petit Pont」、「Pont St. Michel」、「Pont au Change」等の橋も当時からあったことが分かる。面白いのは、当時はこれらの橋の両側がアパートのような家になっていて、セーヌ河の上に人が住んでいたらしい。

「Pont Neuf (新橋)」も当時からあった。「新橋」と言っても決

して新しいわけではない。東京の「新橋」もそうだが。

1675年というと、日本では徳川の4代将軍家綱の頃である。その頃の大名や旗本の屋敷がちゃんと残っているということである。日本でも、寺はもっと古いものがたくさん残っているのだから、住宅も少しは残っていればいいのと思う。

これらは日本へ帰ってから地図を眺めていて分かった話である。

### 荻須高德 - - パリの画家の代表

バスティーユ広場から歩き始めて、ヴォージュ公園を通り抜けて、さらに少し行くと「オテル・カルナヴァレ (Hotel Carnavalet)」に出る。「オテル」というのは英語の「hotel」の元になった言葉だが、もともとは「貴族の館」のことだったようだ。この辺の「貴族の館」はすべて「オテル」と呼ばれている。

「オテル・カルナヴァレ」は現在、パリ市の博物館になっている。その最初の部屋にパリの市街を描いた有名な画家の絵が展示されていた。そして驚いたことに、その部屋の入口の正面に掛かっている絵は荻須高德のものだった。パリの市街を描いたフランス人の有名な画家はたくさんいるのに、何故日本人の画家がパリの代表のように扱われているのだろうか？

しかしこれは驚く方がおかしいのかも知れない。ゴッホも、モディリアーニも、シャガールもパリで活躍したが、彼らはみんなフランス人ではない。フランス人じゃないとパリの代表になれないという考えはパリ市民にはないようだ。それだけパリは国際都市だということだろう。そういう点では東京などまだまだ足元にも及ばない。

最近渋谷の美術館で荻須高德の展覧会があり、パリの裏町の汚い建物を描いた絵がたくさん展示されていた。「オテル・カルナヴァレ」に展示されていた絵にも久しぶりで再会した。

それにしてもこの人は、汚い建物ほど美しく描いてしまうという不思議な才能の持ち主だ。そして建物の汚れた壁を真っ正面から見て絵にしてしまうという、信じがたい芸当をしてしまう。普通の人が描いたら、およそ絵になるような題材ではないのだが。

オテル・カルナヴァレの同じ部屋には藤田嗣治の絵も展示されていた。

## ピカソ - - 破壊の天才

さらに少し歩くと「ピカソ美術館」に出る。これも昔の貴族の館の一つで、最近ピカソの美術館として使われるようになったとのことである。

ピカソの作品が年代順に大量に展示されていた。どちらかというと晩年のグロテスクな作品が多いようだ。また、絵以外の、木や金属で組み立てた一種の彫刻のようなものも多かった。

私はこういうところで実物の絵を見るときは、できるだけ近づいて、その画家がどういう描き方をしたのかを見るようにしている。

例えば、オルセーでゴッホの絵をたくさんまとめて見たが、絵の具の贅沢な使い方に驚いた。「絵の具で塗った」と言うより「絵の具の固まりを並べた」という感じである。そして、油絵の油の光沢がほとんどないのに驚いた。この人は油をほとんど使わないで油絵を描いたのではないだろうか？　こういうことは写真ではなかなか分からな

い。

ピカソの絵をよく見ると、描いている途中に何回も気が変わって描き直したことがよく分かる。最終的な絵とは全く関係がないところに前に描いた線の盛り上がりがはっきり見える。修正などというものではない。気が変わると、前の線を塗りつぶしてしまって、全く違うものを描いている。最初に完成品のイメージが頭にあったとは思えない。「創造」と「破壊」、「創造」と「破壊」を繰り返して、最後に「破壊」をやめた時にピカソの絵が完成するのだ。

そんなことを考えながら作品を見て廻った。

やはりこの人の作品は若い時代のものの方が好きだ。

## 中古住宅売ります

さらに行くと「オテル・スピーズ (Hotel Soubise)」という建物がある。ここも一部は博物館になっており、ギロチンの模型などを展示している。

ここは、昔の部屋にほとんど何も手を加えずに、そのままの姿で見せている。ロココ調の彫刻がある立派な部屋で、多少いたんで汚くなっているのだが、展示のために修理するとか、清掃するとかしていない。わざとそうしているのか、金がなくてできないのか分からないが、とにかく手を加えていない。

数ヶ月前まで住人が住んでいて、引っ越したために空き家になってしまい、目下売りに出されているという感じである。

なまじ変に手をかけてきれいにしてしまうより、この方が昔の雰囲気直に伝わってきて、ずっとよい。



## 石油化学プラント（？）

さらに少し行くと「ポンピドゥー・センター（Centre Pompidou）」に出る。

17～18世紀の建物に囲まれて歩いていたのに、突如として20世紀後半の化け物のような建物が出現する仕掛けになっている。それにしても何という建物を造ったものだろう。石油化学プラントのパイプのようなものが建物の外側を一面に取り囲んでいて、赤や青に塗られている。まったく理解しがたいセンスだ。

しかしフランス人にはこういう一面があるのかも知れない。ルーヴルの真ん中にガラスのピラミッドを作ったのもそうだし、私は見たことがないが、新凱旋門もそうだろうと思う。

そういう意味では、エッフェル塔もはじめは、周りとの調和をぶちこわすとんでもない鉄骨の固まりだと言われたのではなかろうか。「ポンピドゥー・センター」もあと100年ぐらい経てば、それなりに周りの景観に溶け込むのかも知れない。

文明の進歩とは「創造」であるとともに「破壊」でもある。

## 排気ガスを吸いながら

別の日には、サンジェルマンからリュクサンブール公園、ソルボンヌ大学、ノートルダム寺院の辺を歩き回った。暑い日だったので、ブラッスリという歩道にテーブルを並べて、軽食を食べさせるレストランで飲んだビールがうまかった。

スケッチブックを持ち歩いていたが、見物に忙しく、なかなか絵を描いている時間がなかった。その日はノートルダム寺院を描くことにした。絵を描く適当な場所がなく、結局ノートルダム寺院の前の広場の地下駐車場の入口のそばの石に腰掛けて、排気ガスを吸いながら描くことにした。

私の絵は、「現場主義」で、下絵30分、彩色30分、合計約1時間で4号の水彩画を現地で完成させてしまう。多少気に入らないところがあっても、後からは手を加えないことにしている。

私が絵を描いている間に、女房が始めて一人でセーヌ河畔の店屋で買い物をしてきた。一人にすれば何とかなるものらしい。

### 3 . ニース

#### 最高級ホテルの隣に泊まる

95年の8月に、女房と二人で南フランスとリヨンに行った。娘がリヨンの近くでケーキ作りの勉強をしていたので、そこの訪問にかこつけて、前から一度行ってみたいと思っていた南フランスに行くことにした。ゴッホや、ゴーギャンや、ボナールや、デュフィや、マティスを引きつけた南フランスの魅力とは何なのだろう？ 地中海を見ながら南フランスの空気を肌で感じてみたいと思っていた。

まずニースへ行くことにした。海岸の「Promenade des Anglais(イギリス人の散歩道)」と呼ばれる道路に面した「ウェスト・エンド」というホテルに泊まり、市内を歩き回った。

後でこの道路の中央分離帯に陣取って、スケッチを1枚描いた。われわれが泊まったホテルの隣の「ネグレスコ」という最高級のホテルを描いたものである。早朝ではあったが、右も左も車の流れが多く、騒音と排気ガスに囲まれて描いた。しかしホテルの建物と椰子の木をいい角度で画面に収めようとする、ここしかなかった。スケッチをするのも楽ではない。

このホテルは、屋根にはフランスの国旗が立っていて、建物の中には赤い絨毯が敷き詰められており、いかにも重々しい感じがした。

### シャガールとオリジナルデザインの骨壺

ニースでは「シャガール美術館」と「マティス美術館」へ行った。シャガールのようなシュールレアリスムの絵は本当はあまり好きではないのだが、前によく行った鶴巻温泉の「陣屋」の女将さんが、「素晴らしかったので、是非行きなさい。私ももう一度行きたいわ」

と言うので、「シャガール美術館」に行ってみることにした。

シャガールの絵は印刷したものは時々見るが、先ず実物が大きいのに驚いた。人の背丈の2倍もある絵がたくさんある。そして思っていたよりはるかに色が明るく、鮮やかだった。背景の明るい青はやはり南フランスの明るい日差しの産物なのだろうか？

「陣屋」の女将さんはご自分で日本画を描かれるし、焼き物も作られる。最近ご主人を亡くされたのだが、その骨壺をご自分で作られたという。生きているうちに、その人にふさわしい絵を描いた骨壺を作って、生きている間は、花を生けたりして毎日慣れ親しみ、死んだら

その中に入るのがいいんだそうだ。

「死んだらずっとそこで過ごすのだから、味も素っ気もない真っ白の骨壺よりその方がずっといいじゃないですか」

とのことだった。

「最近、この話を聞いた人から注文が増えて、忙しくて」と言われていた。

私は見たことがないが、多分その骨壺の絵はシャガールの絵みたいなものじゃないだろうか？ 恋人同士や馬や牛や鶏や、その他様々なものが、横になったり、逆さまになったり、ふわふわと空に浮かんでいるのは、死後に見る夢の世界を描いたものではなからうか。

そんなことを思いながら、美術館の中をひとまわりした。

## 夾竹桃と蝉

「シャガール美術館」を出て、「マティス美術館」に向かった。「マティス美術館」は、さらに郊外の方にあり、歩いて20～30分かかった。

日差しが強く暑かったが、乾燥しているので気持ちのよい暑さだった。ニースの郊外の住宅には、夾竹桃の花が咲いている家が多かった。お盆前後に夾竹桃が咲くのは日本と同じだな、と思いながら歩いた。

蝉もよく鳴いていた。但し鳴き声は日本の蝉とだいぶ違っていた。日本の油蝉のように、「ジャー---ツ」という威勢のいい鳴き方はしない。やはり油蝉の一種と思うが、「ジッ.....ジッ.....」という感じの遠慮がちな鳴き方である。これは他の場所でも同じだった。日本の油蝉は高温多湿地帯にふさわしい鳴き方をする。それに引き替えヨー

ロッパの蝉の鳴き方は高緯度地方を感じさせる、と思ったのは私だけだろうか？

道を聞きながら、ずいぶん坂を登って、道を聞きながらやっと「マティス美術館」にたどり着いた。

### マティス美術館

そんなに多くの美術館に行ったわけではないが、一人の画家の美術館としては、ここはもっとも大きいクラスではなからうか？ 300点以上展示されているとのことである。

例によって近づいてよく見る。

白いバックに青の単色で女性のヌードを描いたものがたくさんある。これは描いたものだとばかり思っていたらそうではなかった。青い紙を切り抜いて白い紙に貼り付けたものだった。少しづつ形を変えて切り抜き、角度を変えて貼り付けたものが実にたくさんあるのだ。ここへ来ると、試行錯誤の過程が全部陳列されている。紙の切り方の乱暴さに感心する。それがかえってたくましい創造力を感じさせる。やはり実物を見ないとこういうことは分からない。

### フォアグラとブイヤベース

フランスへ来たからには、本場のフォアグラとトリュフを食べてみよう、そしてマルセイユでブイヤベースを食べよう、というのがこの旅行の一つの目標だった。ニースへ着いた日は、夜も遅く、飛行機の

中でさんざん食べた後だったが、早速食いしん坊ぶりを発揮して、ホテルのレストランでフォアグラのオードブルを注文して女房をびっくりさせた。

ブイヤベースは本場のマルセイユで食べようと思っていたのだが、次の日ニースの港に面したレストランに行くと、さかんにブイヤベースを勧めるので、ここで食べることにした。他の店の味は知らないが、洗練されたフランス料理という感じからはほど遠く、いかにも漁師用の料理という感じだった。地中海の港のそばで食べる料理としては、それがかえって土地柄を感じさせてくれてよかった。

そのシェフは静岡のレストランに料理の指導に行っていたことがあるということで、帰り際にわざわざ奥から出てきて握手をしてくれた。

#### 4 . アルル

##### ローマの3点セット

ニースで2泊した後、鉄道でアルルに向かった。

アルルは30分も歩くと、町の端から端まで行ってしまうような小さな町だった。ローマ時代の円形闘技場が、ローマのコロッセオより完全な姿で残っていた。いやそれどころか、今でも現役で、闘牛等に使われていると聞いて驚いた。

ローマ時代の野外劇場後も残っていた。今でも催し物が開催されるらしい。ローマ時代の浴場の跡まであった。

闘技場と野外劇場と浴場 - - ローマ時代の3点セットが完備していた。ここはローマ帝国の町だったのだ！

カエサルの頃ローマ人は現在のパリ、ロンドンまで攻め込んで砦を築いた。しかしそれらの都市とは違い、アルルではローマ帝国の市民が、ローマの文化的生活をしてきたのだ。そういう意味でプロヴァンスは真にローマ帝国の一部だったのだと思う。

町のそこここでローマの臭いがしていた。

町は城壁に囲まれていた。これもローマ時代からあったものだろうか？ もう少し後の時代のものかも知れないが、いずれにしても古いものだと思う。現在の町の中心部もほとんどこの城壁の中だ。つまり1,000年以上前からこの町はほとんど大きくなっていないのだ。

鉄道の駅も、高速道路も、全部城壁の外だった。城壁は外敵の侵入から防ぐだけでなく、機械文明の侵入も遮っているようだ。

アルルの駅前には店屋など何もなく、賑やかなのは城壁内の昔からの市街だけだった。

城壁の外側に沿って朝市が立っていたことがあった。野菜や果物や魚を売っていた。果物屋で桃とネクタリンを買って列車の中で食べた。タクシーの運転手に聞くと、

「週に2回朝市が立ちます。1回はここで、もう1回は町の反対側です」

とのことだった。

ゴッホの「黄色い家」

アルルはゴッホが晩年住んでいた町だ。ゴッホにはアルルの町や人

を描いた絵がたくさんある。アルルで買った地図に、ゴッホがどこでどの絵を描いたか、絵と場所の対応を書いたものがあつた。これを頼りに町を歩いた。

ゴッホが入院していたという病院は、絵そのままの姿だつた。

フォーラム広場（Place du Forum）にはゴッホが描いたようなカフェが何軒もあつた。

ラマルティンヌ広場（Place Lamartine）で「黄色い家」という絵を描いたという。よく似た感じの建物があつたが、少し違う。何故だろうか？そこは今レストランになっていたので、一休みしてビールを飲むことにした。

注文を聞きに来たその女の人の、地図に描いてある「黄色い家」の絵を見せて、

「この絵を知ってますか？」

と聞くと、黙って奥へ引っ込んでしまった。

私のフランス語が通じなかつたのか？ 機嫌が悪くて取り合ってくれなかつたのか？ 分からないでいると、店の奥から古びた写真を2枚持って来た。現在の建物の前方の建物を「取り壊す前」と「取り壊しているところ」だという。「取り壊す前」の写真にはちゃんと「黄色い家」の通りの家が写っている。そして後方にある大きい建物は「黄色い家」が描かれた当時も、現在も、同じであることが分かつた。

後で知つたが、ゴッホはしばらくここに住んでいたのだそうだ。

アルルを発つ日、ホテルから駅に向かうタクシーに、ゴッホの「跳ね橋」に立ち寄ってくれるよう頼んだ。これは観光用に後から作られたものと聞いていたので、それほど興味はなかつたが、アルルの郊外の景色を見たいと思い、立ち寄ってもらうことにした。

跳ね橋に行ってみると、驚いたことに、観光客も地元の人も一人も



いない。日本だと、ガイドブックに載っているような所には必ず観光客が何人か来ているのに、大変な違いだ。

タクシーの運転手にわれわれ二人の写真を撮ってもらって駅へ向かった。

### アリスカン - - 石棺に囲まれて

われわれが泊まったホテルから歩いて10分もかからないところに、アリスカン（Alyscamp）という昔の墓地の跡があった。行ってみると、鬱蒼と木が茂っていて、ほとんど人もいなく、道の両側にずらっと石棺が並んでいて、気味が悪いくらい静かだった。ローマ時代から中世にかけて、全国各地から遺体がここに運ばれてきて葬られたのだそうだ。

ここで、石棺に囲まれて、苔むした石造の建物のスケッチを1枚描いた。下の方に見える大きい石が石棺である。

### アルルの女

いまや、大きいレースの襟の付いたブラウスを着、長いスカートををはいた、いわゆる「アルルの女」の民族衣装の姿で町を歩いている人はほとんどいない。われわれが出会ったのは、町を歩いていた年輩の女性が一人と、博物館の案内係の女性だけだった。日本で和服を着ている女性の数より少ないかも知れない。

アルルの人のフランス語の発音はパリ等の人とちょっと違うようだ。ほんの少し耳にただけだが、例えば「Bonjour」というのが「ボ

ンジョルニ」が「ボンジョルネ」に近く、フランス語とイタリア語の「Buon Giorno」との中間のように聞こえた。

もともとプロヴァンスでは、現在のフランスの標準語の元になった北フランスの言葉でなく、“Langue d’oc” と呼ばれる「プロヴァンス語」が使われていたというが、現在でもその発音の名残をとどめているのではなからうか。

アルルの人は礼儀正しく、丁寧な言葉を使うと思った。アルルの駅の売店でアルルの地図を買ったら、売店のおばさんに、“Je vous remercie.”と言われたが、こういう言い方はパリではまず聞けないのではなからうか？

## 5 . エクサン・プロヴァンス

「ベースキャンプ方式」と「一筆書き方式」

アルルを「ベースキャンプ」にして、エクサン・プロヴァンス、マルセイユ、アヴィニョンへ行った。

一個所を「ベースキャンプ」にして、そこから往復する方法と、「一筆書き」で旅行する方法とあるが、毎日スーツケースから持ち物を出したり入れたりするのが面倒なのと、重たいスーツケースを持って歩きまわるのがいやなため、乗り物に乗っている時間は増えるが、日帰りができる範囲は「ベースキャンプ」方式で行くことにした。

但しこの方式の欠点は、各地のちゃんとしたレストランで晩飯を食べるのがうまくいかないことである。町を歩き回ったラフな格好では、

ちゃんとしたレストランへは行けず、フランスの夕食は始まるのが8時過ぎの為、それまでなんとか時間をつぶさねばならず、また食事が終わるのが10時、11時になる為、気をつけないと泊まっている町まで帰れなくなってしまうのである。

しかし、とにかく、重たいスーツケースを持って毎日のように動き回るのにはかなわないので、決められた日数は乗り放題の鉄道の切符をフルに使って、できるだけ「ベースキャンプ」方式を活用した。身軽な格好で自由に動き回れる点が最大のメリットである。

## セザンヌのアトリエ

エクサン・プロヴァンスへ行くことにしたのは、セザンヌのアトリエと、セザンヌが好んで描いたサント・ヴィクトワール山を見たいと思ったからである。セザンヌはここで生まれて、ここで死に、ほとんどの絵をこのアトリエと、この辺の郊外で描いたという。

エクサン・プロヴァンスの郊外にあるセザンヌのアトリエに着いたのはちょうど昼過ぎで、そこは閉まっていた。30分ほど外で待って、やっと入ることができた。われわれの他には見学者は二人しかいなかった。ここまで来るのはやはり相当な物好きなのだろうか？

アトリエの中は、セザンヌが絵を描いていた当時のままになっており、セザンヌの絵で見覚えのある、キューピッドの石膏、骸骨、花瓶、果物、等が無造作に散らかっていた。大画家のアトリエにしては何の変哲もないものだった。

セザンヌがサント・ヴィクトワール山を描いたところに行ってみたくて思っていたが、時間がなくなってしまったのでやめた。帰りの列

車で、その山の方向を見ていると、セザンヌの絵の通りの赤い岩肌の山を、ほんの短い時間だけ見ることができた。

### 道は建物と建物の隙間

エクサン・プロヴァンス（Aix-en-Provence）は昔はプロヴァンス地方の首都だったという。“Aix”という言葉はフランス語の辞書でも見当たらないが、もともと何語でどういう意味なのだろうか？ シャルルマーニュの生地のアーヘンも昔は“Aix”と呼ばれていたという。“Aix”がヨーロッパに何カ所もあり、それらを区別するために、プロヴァンスの“Aix”を“Aix-en-Provence”と呼んだのだろう。

町が古いだけに、旧市街の道は細く曲がりくねっていた。とても車がすれ違ったりできない。工事用のトラックが通ろうとすると大変な騒ぎで、片側の車輪を歩道に乗り上げてやっと通っていた。

これは、ニースやアルルの旧市街でも同じだった。

前に読んだ本に、古いヨーロッパの町は、道に沿って建物が建てられたのではなく、建物と建物の間の隙間が道として使われているのだ、と書いてあった。そう思って見ると、建物の大きさによって、道が広くなったり、狭くなったりしているのも、四つ角の手前側と向こう側で、道がずれていることが多いのも、よく納得がいく。

建物の大きさの関係で、たまたま隙間が広くなったところが広場なのだ。

フランス人にとって外国人とは？

エクサン・プロヴァンスの通りをビデオで撮っていたら、視界に男が一人入って来た。するとその男が急に私に文句を言い始めた。フランス語がよく分からなかったが、どうも「やたらと人を撮るな！」と言っているようだ。「人を撮ろうとしたわけじゃない。町を撮っていたら、たまたまお前さんが入ってきただけだ」と言ってやりたかったが、私のフランス語の力では無理だ。

しかし黙っていると、相手はいつまでもまくし立てるのをやめない。しかたがないので、

「Je ne comprends pas! (分からない! )」

と怒鳴り返すと、相手はあきらめて行ってしまった。

こういうことは他にもあった。

アルルからリヨンに向かう列車で、スーツケースを普通の車両の荷物置き場に置いて、われわれが予約した隣のコンパートメントの車両の方に行こうとすると、乗り合わせたおばさんに捕まってしまった。どうも、

「スーツケースを自分のコンパートメントに持っていきなさい」

と言っているらしいがよく分からない。とにかく人の前に立ちはいだかっていつまでも文句を言っている。

外国人に対する態度が日本人とはまるで違う。日本人は、あきらかに日本語が分からない外国人を捕まえて、日本語で長々と文句を言ったりするだろうか？ 彼らには自国人と外国人の差が非常に少ないようだ。

「自国人、外国人の区別なくフランスではフランスのルールに従え！」

「フランスへ来たからにはフランス語を話せ！」

という態度が徹底している。そして自国人、外国人の区別なく、ル

ール違反者を見かけたら必ず文句を言う。

前に、フランスではないが、ジュネーヴのホテルから電話をかけて、英語でレストランを予約しようとしたら、

「Parlez francais ! ( フランス語を話せ ! ) 」

と言われて驚いた。国際都市の町のど真ん中にある、JTBが契約している大きいレストランなので、まさか英語が通じないとは思わなかった。しかも何も難しい話をしようというわけじゃない。「今晚XX時に二人予約したい。名前はXXです」、ただそれだけである。これなら私の拙いフランス語でさえ用が足りる。

「ジュネーヴはフランス文化圏なのだ」と再認識した。

ひるがえって、われわれ日本人の外国人に対する態度を考えると、相手が外国人と分かっただけで、言うべきことも言わないことが多いようだ。

フランス人の態度には閉口することもあるが、見習うべき点もあるようだ。

## 6 . アヴィニオン

ヨーロッパの町の「城壁」

アルルから鉄道で日帰りでアヴィニオンへ行った。アヴィニオンはローマ法王が一時いたこともある古い町だ。

アヴィニオンの駅を出て、先ず驚いたのが、立派な城壁がほぼ完全な姿で残っていることだった。アルルの城壁も残っているが、こっち

の方がより完全な姿で残っている。そして、アルルと同様に、鉄道の駅も、高速道路も城壁の外だ。ここでも、市街地はほとんど昔からの城壁の中だ。

ヨーロッパの町の城壁は、町をぐるっと囲んでいる。これはヨーロッパだけでなく、例えば北京などもそうだ。これは例えば英語では“rampart”と呼ばれる。これを日本語では普通「城壁」と言うが、「城の壁」ではなく、「城」とは全く独立の建造物である。

それに引き替え、日本の城の「城壁」は「城」を囲んでいるだけで、町はその外にある。江戸城でも濠の内側にあったのは、一部の大名と旗本の屋敷だけだ。

ヨーロッパの城主は市民を外敵から守ったのに、日本の城主は自分の直接の家来だけを守り、領民は見殺しにしたのだろうか？

どうもこれは戦争の本質的な違いから来ているように思う。ヨーロッパの大戦争はほとんど異民族間の戦いだ。「ローマ」対「ガリア」、  
「ローマ」対「ゲルマン」、「ゲルマン」対「フン」、「ゲルマン」対「サラセン」等皆そうだ。そして民族が違えば宗教も違う。つまり異教徒間に戦いとなる。異教徒と戦うときは、旧約聖書に、「女、子供、赤ん坊に至るまで皆殺しにせよ」「敵を根絶して禍根を断て」とあるように、敵を全滅しようとするが多かったのではないかと思う。

その為、自分の一族や家来だけを守っても、領民を皆殺しにされたら、その後の生活が成り立たなくなるため、領民ごと城壁で囲って、外敵から守ろうとしたのではなからうか。

それに引き替え、日本人は、国内で異民族と戦ったことが全くない。戦争は日本人のプロ同士の戦いが中心で、町民や、農民が巻き込まれることはあっても、皆殺しにしようとした戦争は一度もなかったの

はなかるうか。

その為、町全体を守る城壁は構築されず、「城壁は自分の一族だけを守ればよい」という考えになったのではなかるうか。

## ローヌの河畔で

アヴィニオンでは法王庁の建物の一つをスケッチしようとしたが、スケッチを始めたとたんに、にわか雨が降ってきて、法王庁の教会の建物でしばらく雨宿りした。20～30分で雨は止んだが、スケッチのために座っていたベンチがびしょ濡れになってしまったため、そこでスケッチはあきらめ、かの有名な「アヴィニオンの橋」を見に行つた。

この橋のスケッチを描こうと思ったが、なかなかいい構図で橋を捉える場所がない。付近を歩き回って、やっとローヌ河の土手で、橋を斜めに見て、上の方から柳の枝が垂れ下がっているところを見つけ、そこでスケッチをすることにした。

下が雨でびしょ濡れのため、新聞紙を敷いて、その上に腰を下ろしてスケッチを始めたが、土手の斜面が急なため、河の方へずり落ちそうになるので往生した。いい角度で対象物を捉えるのも容易ではない。

## 7. リヨン

「ポール・ボキューズ」と「レオン・ド・リヨン」



プロヴァンスを後にして、列車でリヨンに移った。ここでは、娘がケーキ作りを習っている学校を訪問した。それは、リヨンからソーヌ河の上流に向かって、車で1時間位行ったところにあるレイリュウ（Reyrieux）という小さな町のはずれにあり、古いシャトーを使っていた。

また娘がお世話になっている、寺田さんという、リヨン大学で日本語を教えている女性のお宅を訪問してお礼を申し上げた。

リヨンの郊外に、「ポール・ボキューズ」という有名な三ツ星のレストランがあるという。リヨン訪問の記念にここで食事をしようと、日本を出発する1ヶ月ほど前に、娘に頼んで予約してもらった。かなり前から予約しておかないと席が取れないということだった。

レストランはリヨンとレイリュウの間のソーヌ河沿いにあったが、その建物のけばけばしさに先ず驚いた。フランス料理のレストランというより、遊園地の建物という感じだった。

われわれ夫婦と、娘とその友達と4人で食事をした。

私はここで、一度食べてみたいと思っていた、三大珍味の一つのトリュフを始めて食べた。トリュフのスープをとったのだが、正直言って、ちっとも美味と思わなかった。何故これがこんなに騒がれるのか、三大珍味に数えられるのか、まったく分からなかった。

食べ物は食べ慣れないとうまさ分からないのは確かだ。アメリカ人に始めてトロやタイの刺身を食べさせたって、松茸を食べさせたって、本当のうまさは分からないだろう。しかし始めて食べたものでも、フォアグラはなかなかうまいものだった。だがはたしてトリュフは食べ慣れればうまくなるのだろうか？ 何とも不思議な食べ物だ。

メインディッシュには、「ルジェ（Rouget）」という魚の上にジャガイモをスライスしたものを鱗状に一面に並べたものを食べてみ

た。えらく手間をかけた料理だとは思ったが、期待が大きすぎたのか、味については特に感動がなかった。

だいたいレストランの等級付けなど意味があるのだろうか。一つのレストランに料理が何十種類もあり、その中には当然うまいものも、うまくないものもあるだろう。魚の味等は獲れた場所や時期で大幅に違う。人の好みの差も大きい。これらを考慮した公平な等級付けなど果たしてできるものだろうか？

ムニュ（Menu）と呼ばれるコース料理は量が多すぎてとても食べられないと聞いたので、各自一品料理を頼んだが、それでも一人当たり16,000円位かかった。ムニュだとだいたい20,000円位かかるそうだ。料理の割に値段が高すぎるのも印象を悪くした。

個人的な好みでいえば、前の日に、ホテルから予約して女房と二人で行ってみた、「レオン・ド・リヨン（Leon de Lyon）」という、リヨン美術館の裏手にあるレストランの方がずっと印象がよかった。

入口は探すのが難しいぐらい地味で、中はとても空いていて、落ち着いた雰囲気だった。ここでは私は「ブロシェ（Brochet）」という魚を食べてみた。ウェイターの感じもよかった。

娘はその後ここで、「トリュフづくし」という、トリュフをいろんな風に料理して出すコースを食べたそうだ。ここでこれを食べてみたかった。

### 「マリオネット博物館」と「リヨン歴史博物館」

リヨンの旧市街に「マリオネット博物館」という、マリオネットやギニョルの人形を展示している博物館があるというこので行っ

てみることにした。「リヨン歴史博物館」も同じ建物の中にあるという。ところがいくら捜してもそれらしい建物がない。近所の店屋の女の子に聞いてもそんなものは知らないという。心細くなったが、最後に「あそこかも知れない」というので、通りから入り込んだ広場に面したその建物に行ってみると、小さな看板が出ていて、やはりそこだった。

どうも土地の人は「ガダニユ館 (Hotel de Gadagne)」と呼び、「マリオネット博物館」等とは呼ばないらしい。土地の人に通じる言葉で書いてない日本のガイドブックにも困ったものだ。

「歴史博物館」に、リヨンの昔の地図が展示してあった。それを見ると、ソーヌ河の西側の、現在旧市街と呼ばれるところが町の中心で、ソーヌ河と、その東を平行して流れる、ローヌ河の間が新しく開けつつあり、ローヌ河の東側には何もなかったことが分かった。現在パールディユ (Part-Dieu) 駅や、われわれが泊まったブルマン・パールディユというホテルやショッピングセンターのある辺りは昔は何もなかったのだ。ちょうど東京の渋谷の繁華街が江戸時代には狐や狸が出る場所だったのと同じようなものだろう。

リヨンの町は、旧市街の西側は山なので、東へ、東へと開けていったことがよく分かった。

(完)

1996年10月 (第1版)

1999年7月 (第4版)